

テレビ漬け

今年の夏はよくテレビを観た。

もともと夏が好きだから、その季節感の象徴のような甲子園の高校野球が観たくて、夏はことにテレビに親しむ方だけれど、今年は甲子園が始まらないうちにバルセロナオリンピックがあつて、毎晩のように観ることになった。東京大会以後、オリンピックを今年ほど熱心に観たことはない・・・と思い込んでいたが、その東京大会を実はあまり覚えていない。

一九六四年十月の東京大会当時は外科系大学院の二年生で、法医学教室でネズミの背中に傷をつけては殺すことを繰り返して、傷の周りの酵素活性を調べていた。動物の生きた皮膚は傷つけられると直ぐに治癒機転が働き始めて酵素活性が高まって来るが、死んだ皮膚ではそうはならないことを利用して、人間の屍体の創が生前に出来たものか死後のものを鑑別出来ないかという実験だった。無論駆け出しの若造が独力で何かを始められるわけは無く、研究のアイデアは教授から指導されたものだった。

その頃既に医学博士という肩書の有無は開業医には勿論、勤務医にも研究者にさえも何の意味も無くなっていたが、だからといって新米医者が博士号取得に関心を持たなくなるわけではなく、医者の殆どが博士号を持つという状況自体が、逆に新米医者にとって圧力になっていた。当時私達は「博士号は足の裏の飯粒だよ」と自嘲的なつぶやきを聞かされたものである。飯粒は取っても取らなくてもどちらにせよ何の役にも立たないが、気になるなら取っておけという意味である。

国家試験を通過してライセンスを得ただけで実務は何も出来ず、漠然とした将来への不安を抱えた新規参入者にとって医学博士という肩書はやはり「気になる」もので、人並みに取れるものは取っておくに越したことは無い「資格のようなもの」に思われた。中学校以来試験々の連続で、得点は他人よりも一点でも多く獲った方が勝ちというシステムのなかを駆け上つて来た私達には、大きなプラスにならなくて横並び一線にしても、とりあえずは人並みに振舞っておくことが大切だった。そして、論文さえ書ければ、大学院は「足の裏の飯粒」を四年間で取ることを保障してくれるものであった。

私はこの中途半端の時期を学部二年生の頃から出入りしていた縁で、水島コンビナートの一角にある医療生協病院の社宅に住み込ませて貰った。ここで週三日は院長の指導を受けながら外科の実地診療を手伝い、三日は大学に通って法医学の院生としての指導を受けるといふ、私にすればいわば二股言葉の格好になるが、法医学教室は研究要員を、生協病院は医員をそれぞれ少なくとも数年間は確保出来、私は医学博士号を頂戴出来るという三方皆得のスグレタ仕組みに組み込まれることになった。

私の母親は自分の子の将来は医者と決めていたような気がする。そうかといって五歳年長の兄が血を見るのは嫌いだといって医者にならなかったのをいつまでも悔やみ続けることはなかったし、私が日本史を勉強するつもりでいると云った時も、人助けが出来るからお医者さんもいいよ、というだけで私に翻意を強制はしなかった。が、若し私が史学科進学を強行していたら、口には出さないにしてもひどく落胆したに違いない。

明治三十六年美作の山奥に生まれた母がどういったいきさつから大阪日赤で看護婦になったのかを、私はついに知らないままで終わった。寡黙な母の口から彼女の若かった時の抱負を聞かされることは無かったが、四十年間黙々として働き通した母が息子の医者になるのを楽しみにしている、いや生き甲斐にしていることくらい諄々と説かれなくてもよく解っていた。子供は親の背を見て育つというが、確かに母の願望は背中が語っていた。

しかし生意気盛りの私は、目の前に展開している、かくも多様な選択肢の中から、よりによって親の希望している籤を先取りして引くことはしない、これは自分の人生だからと心中密かにオダをあげていた。これも一種の反抗期、背伸びであったのだらう。

そのくせ平凡な子供が大抵そうである様に、私も大学受験を迎えて志望学部を決めなければならなくなった時、自分が将来何をしたいのかがまだはつきり判らないままだった。結局仕事というものがどういうものかが判っていなかったのだと思う。もっとも大学は決まっていた。中学の頃から憧れていた大学があつて、それ以外は考えてもいなかった。

学科では高校二年で教わった富岡先生の日本史が好きで、うる覚えの史実や人名が時代の流れを大観する叙述のなかで、なるほどそれにふさわしい位置にびたりと決められるのに感服していた。真実はひとつしかない自然科学と違って、史観や叙述の違いでどうにもなる可塑性のある人文科学が好きだと自分では思っていた。しかし、それは授業を受けていて楽しかったということに過ぎず、史学の研究者を職業として選んで将来後悔しないだろうかとの自問に、やってみなければ判らないと答えざるを得ない程度の執心だった様である。研究者といえば聞こえはいいが、職業としての教師には魅力を感じなかったということかもしれない。法律や経済は情感に乏しく、勉強の対象にしては無味乾燥で初めから論外であつたし、数学物理化学などには才能が無いことは自明で、従つて深い興味も湧かず受験に必須だからやむなくやっていったようなものであつた。

何を職業とするかを決めるべき時期に、決定的にこれだというものを発見出来なかった私は、職業として何を選ぶほうが、そのための戸惑いも困難もあるいは歓びでさえも、結局似たようなものならば、母親の希望に添つて医者になつた方がいいじゃないかと不意に思いついた。結局同じことならばこはまず親孝行すべきだという、岐路を目前にしての突然の翻意だつた。こんがらかつた紐が不意に解けたみたいで自分でも驚いたが、三十五年経つた今、振り返ってみると十八歳の時のこの決断は概ね正しかつたと思う。幼い時から母が私に掛け続けていた催眠術が土壇場で効果を発揮したのかもしれないが、それにしても母の望む通りの進路を選んで、母を心底喜ばせたことが何よりも嬉しい。また母の歡喜

が父をも幸福にしていることが良く判って嬉しかった。親孝行をしておいてよかった・と、両親に永訣して久しい今にして思う。

ただし、ひとつ心残りがなくはない。

志望を医科に決めるなら地元の良い大学があるじゃないか、何も遠方の学校に行くことはないだろうという友人の落ち着いた意見に一も二も無く従うことになったのは、私にとってもそうすることがスジを通すことだと思っただからで、実は本音は違っていた。その頃、勉強したいことがはつきりしないのに有名大学に行きたがる高校生を、「東大病」と称してあたかも社会病理現象でもあるかのように揶揄する風潮があった。競争を勝ち抜く学力もないくせに高望みをする若者を冷笑する意味と、最終学歴を飾るだけに墮しているのが現実としても、建前としては大学はやはり学問をしたい人間の行くところであるべきだという、いささか古めかしい大学観の表明でもあった。私自身は今でもそうだが、こうした紋切り型の「正論」に弱く、是非研究してみたい学問も見つかってないのに有名大学にこだわるのはなるほど虚栄の典型であって、建前としてはそれを恥のごとく感じなければならぬと思い、しかし、本音では幼い時から刷り込まれて来た単純な憧憬を捨てきれないでいた。漠然とした憧憬だけが最高学府志望の動機であって何の不都合も無いと、現在の私は平気でいうことが出来るけれども、若かった私は、もっと見栄っ張りであった。

私が「東大病」などという死語にも等しい言葉を未だに後生大事に抱え込んでいるのは、幼いときから憧れていた大学は別にあつたのに、自分自身の建前に引き摺られて、肝腎の時に素直に行動しなかった、この時の不完全燃焼のせいである。時折だが、いまでも、難関といわれた入試に一度も挑戦しないで終わりにしたのは惜しかったとウジウジ考えることがあるが、勿論、人生も終楽章に入って、結果の出ている現在、それに何の意味も無い。ただ、見栄の張りついでに、入試の難易は問題ではなかったと云わせて貰っておこう。問題はその後のことで、現在までの自分の軌跡を振り返れば、仮にどの大学に進もうが自分の能力ではたいしたことは出来なかつたであろうことは歴然としているけれど、その大学の入試に通るぐらいのことは出来ただろうと思っっている。

後年、私の憧れの大学は、とりわけ医学部の封建的、前時代的な実情が暴露され大学解体、医局解体の全共闘運動の標的になり、主戦場になった。若し単純な憧れの気持ちだけで進学していたらどうなっていたらどうかと複雑な気持ちがあるけれども、どうなるわけもありはしない。学者、研究者ではなく開業医を職業にするのであつたら、どちらにせよ同じことである。結果は既に出ている。

そんなわけで東京大会の時は岡山県の水島でカミさんと所帯を持ったばかりで、仕事を覚えるのに懸命の頃だった。長女が二歳で可愛い盛りであつた。九インチの白黒テレビを買っていたから、休日には娘を膝に実況を観た筈だけれど、覚えているのは開会式の鼓笛隊と整然とした日本選手団の行進、それと女子バレーの優勝シーンだけである。もっともこれらは後年繰り返し放映された映像だから記憶に残っているだけのことかもしれない。以来日々の暮らしに追われて、オリンピックをどこの都市でやったのも判然しない程度

の関心しか持てないまま過ごしてきた。それなのに今年は連夜のテレビ漬けになったのは、放映の皮切りが水泳とか柔道だったからなのかもしれない。唯一自分がまだ続けている運動が水泳で、その自由型に今年は史上初めて決勝進出クラスのホープがいるというので、是非観たいと思った。それと女子柔道の選手で、試合が始まるや否や少しも休まないで攻めまくるチビの女の子が気に入っていて、これも是非観たいと思った。のめりこんだきっかけはそんなところだろうか。

未練がましく机の上に仕事を展げてはあるが、まるで集中出来ないままテレビばかりを観て、結局寝る時間になる、毎夜その繰り返しであった。

(五時通信 第二二号 一九九二年九月十日)